





藤井氏收藏

手よと身も林檎ハ油で面白  
百日乃あいらきや洗ひ程  
血毒を弱めけあけや心てん  
氣のめを清めよとの薬外

七日

解する人の子存ひも如外

山王の氏ありて

新等と天下参や土くろま  
番附をくらも米の子存ひ外  
松原よ田舎ありて昼休を

夏瘦み能因一りもか食し  
と食み天比を看るる夜衣  
高閣挽涼

香蕩散あつあつてまの華  
物幅ま空位のさしや一是  
瞬をりてあま人

うきし舟の涼おゆか子の甲  
ぬそりそく蓮おちるよ船歌

大雨大風

吹降め合羽をそよぐ雨後か

得宵やゆらん見入る者わき  
せき井よりけれの鈴よ

傘おろ月おぼろすくも也  
木舟さふまの合あけりあは  
名月やそ住者のつらき橋  
名不月

塔部上

小くくくたつる月やゆる浮

雨

上 嘉佐野  
弱とめて金貫指さあは  
川節の圓をふいらるる

新日やいらもあつきの男  
水相観の繪し

ふりきりてよめをおもひ求ひし

名月や尻酒のまじりと頬あり

得蟹無酒

懈を画てはま違する目し

名月や五のころの松の影

雨

納屋の油を吹かすけお月

名月や舟を定むるむら雀

夢うとよる泉起て月の色

あつしき

更にと祿宜の軒や秋の月

紀川いづせあり

きりつらあひらあやころの月

所思

心もあつしきとや十四り

名月や金くしひ子の雨の友

園の葉は吉原はらり月あは

月生ては夜低く小舟うさ

人音や月んとるに伏見村

維摩のりし

山のそへ大衆しりう床の月

張良圖

胸中乃共出るあこ月

布衣の月を掬し給ふ

ありてあき水の月をや瓜のよ

寺

古の月あしう膾ハあまもし

名月やうやくあし袖に松

ホウレての  
鳥帽子屋ハ急何三つんどりの

雨倚橋

猿遠子あしんよや橋乃月

含杏亭

あま入星を元標やきよ乃月

風雨

雷子揮ハあしきそ日らん舟

小野川けんきゆうの饑

入月や長芭を袋みちすめん

三日糧をくむよりあ

名くく十歩子錢を握りたり

巴江

聲のれく猿の齒白く暮れ月

舟中よやていも夢を待たま

日たるも杖もつたけり小舟

琵琶はあやめ

言あま比巴を興へて夜も隔  
陽のあよ思ひを酒をさ  
灯をきめて深まにやすふ  
村雨の心をあはれし私酒の耳  
をそいふらるる感あまの十三  
より学ばるる曹保々秘曲  
もはるか人を泣くやうに

まじりもさうり子とせと云り  
其在困ある時て所と色をひ  
とむるものあはれても好まじ  
松を投出たうせ風情及人  
一藝何れやさい

十五酒をのこもさげあの日

あさつ舟よつておを今  
月をこぼすの水干  
南のには

かりしを誰月舟

所懐 京よ

いそぬ事こころ急有きよの

母と月をけりて

おくれゆく雨乞政乃十二夜

旅泊

ふれりや江流て三種徳千之夜  
葉研て、粉炊からすう島の月  
住の江や夜芝居さそく浦れと  
白玉子芋を交まや然り月  
ほの目上の太子れあおゆ  
去りてすむ茶師が旅の  
ほのく躍けりり日傘

十二夜を

やよ月あつ物あき木松河

国十五夜

お乃言来ハハ

脚番亮ハ照月をらん  
激河舞

平家前庭の

舞月

宿あしのおとれては月か

柴少のいあ

名月や皺か人の心世流

名月や人を抱身を膝尻

詩集山

てよみ満を棹のめとみる鳥

契不逢憲

圀の灯の光るを影や油の月  
一休の狂詠自画を写しす

甲申 律師めは相刺をりて月茶

松前のさみ子

送り信り

こころを大根て 清さん

十六宿ハ儒者と名をよみ

漬蓼の種子 九月 ちあつふ

日十之お

笈の菓子ちつちつて日

病中制禁好

橋柳乃串海嵐をらすや月  
友

秋宅

ひ涙をわけてみそやけ

糸園之月をくろあつて

辛く凡俗都の二百貫

雲のひびくんまあちを

物うらとち豆くりり袖の月

鐘声 客舩

名月や市堂の鼓の音て

遊子の身ある松の朧も江の月



馬のやうに馳をえれを身はた

玉津の跡を

わいのいづつお井の月をおぼゆ  
いさよひや龍眼肉乃うら

上文諸上

平家ゆこた系記あつた

吉野のゆめを

こよひにれすくぬの浮世  
せそるりし

秋の月を所や九月を

九月廿七の月を借

る月や大い

石の家と合

又月や陰を感はる故屋の中  
ちやや暮あよひ入て笛をす  
屋合やいよ瘦せの風つら

雨好

鶯や石をかりの橋を  
星名くさ里お

新居

塀梢はけりよか  
天川けあのちしや

あふをよみて

踊子をよみてりくく星ハ地

付能

刺請も廣くふ羽をりけり  
 毎のえに物つげてれりむく  
 二をねむ隣のももあまひ  
 かきしきや丸ちの上よこ川  
 星をや女のよあてあふん  
 河一あひや見えぬる言知翁  
 丸柳の冷やゆきとれ星をむく

地獄下のりて

星阿比や双林塔を能く音  
 橋と成鳥ハいつき夕あふん

七月歌の饒肅山子

あけて竹海ら巻も軽し相の秋  
 首花や角立も星花玉うら

小娘の生は子と老としりけ確

中島崎し 花火の筒のわき  
移さそをきも 逆橋も ちや  
玉川のあふ糸 玉火賣  
このわき

水汲の曉起やすまの 船

増上寺晚景

馬老燈籠使のたさるく

たまらうらうら およみま

水あ敷くよりし 傘

弄化生

あいらの子家とらあや天川

柳徑よみあはれいり 傍の  
袖よりおひぬき ちや  
りの授記 易の有無 價宝珠  
と説せぬし心をちりて

衣あふ 福とこしや 玉さる

水げ島よあそふ

慈山火を昔のまいげや 玉色

玉さるく 門のし食ら 秋とん

よのあはし人や 隣の玉さる

得平酒

洲の隣あつめや 生れ玉

桐花やしらぬりきりあはれ  
見る人もよらぬ花籠にほりたり  
送りたれ 定家の権十文字

千代と  
黄牡丹とあそぶ

お豆あまのうらみ山乃二ん  
稻つまやまのふふふふいあ

妻よおれてな  
ふりやうたをたぬれらるい

らふもや思ふもらふも給ふも  
伴勢の鬼にけしあひる確か  
おふも 志を 曹賢の舟志あ

舟興

をあり花火百もあそびあふ  
扇的も火くくはらる慮は

好子よる三つを悼と

お新よらるやある秋のせと  
鬼灯のくまをくせとのを

悼コ齋

其人の軒にふし秋の蝉

投られて城をめぐりけお撲

よき衣の持しやあすら丸  
ト石や志くくよぬれてせお撲

赤のいりかも賣やお撲札  
相撲氣をいれ月休の夕ふ  
山城のよい練ぬ形や祐西風

遊弘福寺

赤尾や六尺は人唐めり尼

中の御よて

幸清り夢のほつきや昔松

雨後 二句

あすくくる芭蕉子のりて  
群吟を雷お顔よいほほし  
其舞の日陰ありあり中夾舟  
舞子の立のくやああ物  
株のおや度をもりけて小杉原

種竹 三年

竹乃色許由りいささやう情

つらいつらいつらあたり庭の秋

公世よけ松

長生を又野にかりて  
角ふまやいせの建飽乃花爲  
置物ありしつあや秋の暮  
芋の程や蠲きやとじておかし  
客至  
碧池汲少多の埒や夢みむ

暮葉とりふま

好影よふあふふ年のうみ  
花もりし佐助の履は若葉の  
酢ととあま隣の花盛

三遠なす納

子稻酒や稻荷よひおた焼め  
病のちやあ芽あくおある夜  
頬招やあまハせ人よ虫包と

野店無肴核

足あふる亭をよもて新酒亦  
酒買子りくああめ房紙

あ芽あま

化野や焼のらにしの骨ハかり

春日法楽

と哉日秋の夜借をうたふ  
四所の宮の夜借をうたふ  
成の刻をうたふ  
野外夕虫とらふ歌也

晴吟や狂ひ志つ万はるの月

相模川洪落水接天

狼の浮木あるまや秋のあ

二挺立の帰掉

雲を燃ん松の建ふ星のあ

新既や松のあくひの清田

こぼるるの歌也

甲斐野や江さくくと柳小たう

詠事や岩あみくく元管根

子の歌り入る素牛也

破さうん孫なる多岐志津を

阿る長者の事也

中ねる小孫ぬ子ましくはる破

初め新巻

さうの椎の音を仕すハ礎うま  
奥好乃殿やううんしんしん

きと里小野の虫はのまほりて

吾の雨ハ尾毛も折るとおろり

葎や衝孝のあとの眉つくり

あいらのわくくり扇

関守の心ゆるすもや栗かよは

大和のあやうもいふ

泊瀬あふ柿の志のよきを思ひ

蓋源庭

清原や流柿さりすあ

葎狩や山のあもこふ虚も病

め中の葎うり

葎狩や鼻のしあもあ

舟中

あいらの甲生もあや秋の音

秋のや弱もゆうを靴の上

稲葉んよ女侍さうすのし

煉のを尾上の移きをもあ

隅田高橋之記



饑能飯

遠野の船に海を舟の脇目よ  
松虫の旅をんれを友とせし  
柴草とらせをうらりて  
好むも隣を包みおのの巻  
すむりや舞をうらりて

夜を山

寝虫や松のそとへ荷をせり  
山川や松よ越ハあるやの  
きつとこと干山田の時の夕白

二見あて

岩のうへに非風塵しとれ落

長谷歌

山畑乃辛阿る阿るに休後ふ  
川昔の長平あるや谷乃あ  
遠別二役りある阿舟よ  
うらりゆる推阿腕とらふ  
逆水大切新をこころ  
舟楫よ難は阿るう淵の色  
一夜前裁とらふを  
舟楫ハ何子入やらを

切惣きりし

日盛を馬車とせ秋の汗  
おのひる

萩の宿をすひかりや甘茶

既松亭

獅子舞の胸分あすの秋

楓子亭

あしひの権の内併え

井筒を略しる昼

いそはる竹輪をむす小倉

田家

庭をの卯うみ控り萩極うま

妻臺の稻ちん窓はふゆ

饑青流難波

芦刈のうらを食せし破所

隣家よもと稚さを

大絃の晒はえ結りある雁

元結のぬるるすら虫の声

おのり二節の貝をとらて

あけ出乃見まよておは新酒か

帝香月灯を憐

古寺や 洗鉢 少中人所ふ

駿府席番は 籠もちの 厨の

くうよ子 掛掛くも 木洗桶

日仙石玉葉云席が 齒子 籠の

萩すりや 傘に 昔 鞆

あつみの 籠の 籠

花子 太 籠

三栗の 籠の 籠 や 角被

在 籠 籠

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

松の 籠の 籠の 籠の 籠の

感 籠の 籠の 籠の

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

品川 籠の

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

白 籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

籠の 籠の 籠の 籠の 籠の

三十一  
鶴の長上系

うら植子花の袂や 女おま

如是果のころを

二子山二子ひぬりん栗のうら

尾別岸越るまで

燕もおもあははらみうらうて

賈固や音のげしきまの海

鹿の一声とりふうこの

うらうを誰か佛さくはく鹿の声

はばけぬる西子色よりけ流

六十二  
木過ぎまで

門立の袂くはおる男鹿うら

小糸やみ糸くくく蕙の尻

秋葉禪定の時

合おきて花よすうらあきハ

下山

可くおる杖を投るあきハ

芭蕉翁花蘭を悼める詞あり

嵐景一子孤懸をみそれむ

早のうら芭蕉の秋をわらふ

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

二月堂のあつちのあつちのあつちのあつち  
新倉の偽堂のあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

甚五丸のあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

戸部山庄

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

三条橋上

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

菅根

杖の上よりそらへる村の影

高雄

げ新嘗文覚をこらせし

泊濃

松んほふ家のふまじういつせ山

山形

乃後よお祭はくこ片与の山

いせみ

お祭よし能態の拓といはせり

旅思  
可句

南を夜をのつこやとの山はかく

南天の突を包めとや唐の巻

南天や秋をうほむる小倉山

くらの山乃繪ふ

笈の角楯の巻ふ志つれきり

七十の橋とそくすうつるあや

いつくは稲を于瀬や大井川

山の端をやしおるすや破れ笠

水郡

唐鉅を流る水やあかき舟

富士

笠取をくふ土の香をよほる  
おきや 空をふりて

昔面達片をこめて

西帝子八苗守とてこし  
秋の風

旅思 二首

こつくの指をらや  
みろくの路中人よせ  
召した訓子方や  
うづ花やるも餅くふ人の

本多下總守の  
市代宴

後園

いそぎの庭や澄ぼのふ  
手の内所敷こめて

旅り

駕の菴に濡て山吹の菊をこ  
志何し子たを何ある菊の宿

荷今うはる

土室の菊小僧を  
きよの菊小僧を  
まくの菊や靴より

白鷺の墓石もありとさくわあ  
ふ重——地子這菊をさおん  
こい准子初ののころれ 袋菊  
素堂 孫菊の屋より  
け菊く十の北園乃亭主あり

昼菊

さく白く蒼ハ陽ふくねり

菜苑

菊を切ぬゆつもあうり

水鼻 ふくさめくどり菊色

病起 千山ヨリ菊ヲ  
ばそ

大母衣乃りしを押や靴の菊

三吟めて重陽

門酒やる虫の腕乃さくをお

宮川のやうり、酒送せりれし

重箱小花あそびの野菊が

みちとせのそしり名なむあさくの色  
あひあけけるす おのひよりて

ゆつて我七百の所走菊よるん

竹苑のやよあきさくゆき  
うつりちりる花奇あつを

出世者乃つりしつくり菊

翁はひそひの交む子伝せり

時服そ花菊あはさく北芭外



十日菊

親世殿十日の菊をひきて

女子を給ひて

おかげさうござい

かみ屎よりみもの妹が

十日菊

震尊のおまもる菊贈

笠さし西りの菊よ

菊を着てつらさるるや

袖の浦より貝下しよ

白菊を貝の内尖よせん袖の浦

那波をたふれまうらうらう

帝達まの良林よあやう

大工まの久ぶ教や神の秋

御高もあふてなりし

御極をえして髪あまの

内宮 法輝のを拜するふ

力の姉や赤子もおける赤御山

あま

日ハ照る古殿ハ音のかくも

いつれもくわらわたり

たこや小判あつて葉のふ

平津川よそ

花はよ祭主の雲を渡りたり

冠里公歩けりし一歩を

初夜も其の場を以て百足持

周旋の亂の昼よ

台座を一升入乃めりし

栗家の妻を渡らふ

かへりて来て福原漸く

元禄幸未のころ大山榎島へ

お川 ぬりお書略く

品河もつねおめつじ馬の音

とらの

稲塚の戸塚つづく田守

坂浪

宿よりて来を回やうれめ

いせ原

あゝとや離く乃書麦 鳥

御向松よ

生栗を握はめしる 山後水

大山

腰押平のろ岩根乃りおせら

石厨の茶僧

手お提し茶瓶や比めて苔の房

二間茶釜をよそ

白るの尾髪吹さらけしきり

由井のぼる

お寄ふ一のちるおや母のおと

雪乃下もやしらさし

破うら宿の庭子や茶乃居仕

羅巴た乃古樹のものとて

有一代の供奉の崩や ちる 報香

横儿追悼

一嶽を子向まともや 新巻

酒のら初を切影しとる各

一字を探るゆま間を

あいにせや おをを比つての 穴窟入

自画雁

斤是ハやのーんし小田の唐

秋のら祖父の あつり のと

白扇倒懸東海天といへるを  
つまげりてさあふあつてまよ  
みきりてつらむせらるるあはれ  
をきき立おほひて山の羊腹より  
いんじをぬららきを要よりすれと  
いふんもなむちりよとて

白老の西又は糸や普賢富士

未曉吟

袴つきよ階子ふ立ててうら菊ハ

洞房の茶盆象足玉の笛を

ぬげりてせしむを悼こ

とろくや笛のぬまハ塗足履

悼朝叟

此人不二百十リハあはれか

吉田氏

唐祖も糸をきれらるる日向

芭蕉翁十三回

辰宮や鳳尾の宮姑さねたのち

室永三戌十一月廿二日  
女身童女を葬りて

辰宮の宮姑さねたのち

神世は月かろく権くち室を  
さめや福宮の宮姑乃神世は

玉律清くもそ

御事神よりあこしりさめそ

高野よそ十月三日

卯塔の花表やげも神無月  
きりくは片りりやむ所而  
所事すけと時ぬむの聲の  
かみや葱臺乃 片柳

芭蕉每三回

志らくや比も舟旅を墓系  
帆く舟行を也里田のみぞ

遊金閣寺

八雲の楠の板ををりしを  
藁を志て熟るるをそ久し

大和めぐり世比

あゝ時を之論の近たをり

芭蕉翁病床

吹井より露をよほりし時雨

治柿の夕日ろかたる山く  
飼猿乃川窓つらふ志くお

時あくる酔下のそりて村霽

くれあつちのさあち酒  
とこりあつち人よこし

赤麻さかろのゆんあて

小松の舟人をあにふる山は

當院の冥室什物すあく後  
中あも小松との松上く  
いせつれ松くけの硯あ  
箱の上子馬蹄さうすを硯の  
くみり形容と

松陰の硯の息を志くお

世をさるるにけりけり

三尺の力を 西河乃一

本多総司公平侍所より夜  
あつ雨とひきくかきけり  
の  
つらさを教むせよと仰し

蝙蝠や柱を捨つ侍一

守山の子よりを昔時

と月のおらふ花よ

あふいけつを流し

揚子おるのる女下り

神の旅酒匂ハ格と

家こ乃事や居よと

大和らり

ころの城の寒さ

使者指書院へ通る

井波門主應心院殿

あつそりけり

乃二集

風や沖よりきこ

何の家

御流に戴り

紅雲のちれも

玄徳とや祖父の

く所の者けり

つゝ綿一お鬼の耳をうらぐ

大町新宅

お仙や一鏡ついでのお路  
水仙や一花ふりや星月夜  
雨平一羽りけし子や狐の尾  
控んや何〜いさふよお舞り

父の醫師一あれを戯子

純汁よ又本料の吐く地  
何脈あ〜お水のもろや下河原  
何ゆげ〜藻魚け〜白冬を  
表戎十九日〜えん〜ぬ〜

大黒の〜せ〜る家よそ

酔はめ〜大黒おん〜夕を〜守  
おお板子小判投り〜美備

糸屋十右衛門 室あて

磯塚山や都ハ内江戎が  
〜素ハ大根は〜りを純汁  
お猛子鮎も互らすの笑み  
生煮を〜と〜と〜と〜と〜と  
世中お舅をよめぬ〜と計  
日本の風呂吹〜と〜と〜と



あけぬの浦おのりて

純ひらりとくまらる網り

幻住菴とて

雑ぬの名とくちあつてふを

蕪汁や柔のかりたもとぬ

宗隆尼がはるりのあま

4那ふくで豊田のり

薬もあまふくくる合てせこの

蜜の川蕪おくりやんあま

秘薬は清のかきや純汁

純げや祝きのこす能戻り

あつらふそぬもあし並切

柳のきく馬の昔の憲は

霊山ののみち

あまのきりのるをこま死ぬ

生活新五上京

張の末乃扇あまのり

聖の字のやうけ

源流は隠者ふん畑の

はるあ

神楽ふゆとあまを舟乃中

志りくもや一枯木乃夕附日

周旋るまて

うゝひら三井の二王や冬亦立

風や勢田の小橋乃花をこ滴

芭蕉翁をたてまつりて

お指を子みりそ遠やむ口を

石菖のあもあれはや水は露

か生のしゆのふしをたて

縁うらば子よらん心強縁はを

むしせ世悲の重荷やあ子あ着

起出てる志けき方や足感路中

寐んやこらあんのさめを中

け子着てくく路中もこけし

長途狂倡

あの子きんぼる際も中井川

目ぼりをを氣おし路中の信世

山をわめうせう色よりき

何となくを大隣を改れきり

け木やや頼のこれてああ月

果はや二をあきして京月夜

新宅 二句

竹の場乃か庭如し炭俵  
前みもやそはしんを象  
をさあ三十五りよ

お阿ふらおすお袖を納豆汁

霜月朔日の例を

法人や嵐芝居をを象

好柳の市店

人をさんしぬのこも夕涼  
新うせや曉いさむ下邨の橋

お豊老父七十の歎ふ

白河の海をかいたや桐火桶

幡別あらゆふ一倍のすき

あつ六十年の栄花を派

溜子きりあて終りを取

はるまに神をまきこ

や一筆をゆるみしき

粟飯の焦て白あや栗の声

法雲寺老僧春色とはいり

原のや栗吹の家の夷講

はひり片を指家住あいろ小  
蟻のふ子白のこもや糸の菊  
控らんるるの切やそて火打り  
髪質の糸本賊のひとと束拵より

共敵のとう其根うをけみ構

咆のころせ見を盃みして乾を  
と名付しるらりよあせて

炭賣の炭くしてをうれこやこを

折束者らの名句

山茶毛や梅のれらるる盛拵

あつ厚あつやさよ辰のひと  
みくれて束拵よはるあつはら

山行

山火をさる嶼出に雲あつち  
みとれし知らるる池の邊

寒芦 画讚

何ふさしくし家いそけ霜の解  
氷もし盡さるらと 鴛の中

住吉しりて

昔のひさをよより流すや冬の海

月防あを才阿らんまで改  
る行るよ一生涯あひるあ  
をめぐり板らつとあややうや  
この甲よりやけらあつた  
ひらひあふる

火煙うら青磁を拾り

斤手打落しころ火神を幸の  
あのうらあを

志高と灰よりわく火鉢ふ

名もこのりたらあ下  
あや

炭よりあはるのぬり  
手標あ

三年成乾の圃あ

馬代沙をよめる金の甲

炭竈三句

炭や子の猫をゆし釜のふ

炭よりや珍末亀井の朝の松

炭よりや隙のほお鼻はあ

炭竈や煙をぬけた猿の声

かすすも其木あすのあがり

うつし火の七車をきけやあがり

煙火より辛やく人も薫に

炭屑よりやけらあはるあ

あがりあがり一車あめ炭

寒蠅炉をぬらる

情おれてあふくく人の涙

口切や袴のひびくは流薩葡萄

梅津某出田一袋かき  
粉壺の宿まで送付す

こゝろを吞なぬ志つゝ一綱代ち

不居安慰

まゝ雪の爐をぬらぬや灰せ

山中 高客

袷卷の松みくさや三種の松

並肩ハひくさの鬘や寒作

十石ハ髪ふつくこけりあんち

冬川や篠のすくすく竹の糸

雨倚橋

うけしやや澄もあつ橋柱

豚幅や氷の中よわさつ松

野一ツ河しりあつさつ松

煮味や箕子の竹乃くす狐

弟女

内務の古酒をぬらぬや室の梅

市隅の備へ

宮さまをばけしあはまを矢念賣

揚屋のわさぎのなまこはあ  
鴨の色をとりかへて

鴨の色をとりかへての食はるはさけ  
心もや釜のゆらゆらとあそび

浦瀬のちとせ石と 大津の

細い包よとらふての古巻

塩擔子や投てこもふ磯

よき日れよ月のくまもふ磯

妹もよハ嵐の運のちとせ  
薩埵山にて

以及の猿首七段ののちとせ

歌へて鷹のつらきやうき

京のちとせは案内にて

系伊引の舟はあつた

滝はあつたてと池はあつた

人形講 月次よ

沖の帆もつらきや候あつた

お國橋上 二句

風の舞はよらや寒念仏

客も念仏橋をこめれを候あつた

酒飯の飲酒ハつらよ客も念仏

去来家まじ

千々々らか首割るを辨和

ことく九ぬそ六やじし辨和

南都よのえつる時

寒色や南大門 乃る徳力

ひらち帯のちりりあを

かりひよのせゆるしく

とれとまら縁起すんで里津棠

お神楽や鼻息白く面の肉

雪買ふちを治さや霧の雪

清ぬ飲ひめをりて

あーれ雪の舞臺の目れ気色

知恩院所み宿とらて

初雪よあつたうららのあうさ

大津おのりよよそ

雪の目や船底との顔の色

ひらちの宿あて

馬くいは貧乏いふ 雪の宿

寒山のこじん

めろ恩よ門の雪はくを食外



西運寺興行

初春ふくみのるるの伏見舟  
あ雪とあつ川煙一笠のうし  
らんちや赤子あしゆる お歌  
はらんちや 雀の枝おの小土足  
門よりお字を留る

る小炭はをいぬけ雪の門  
燐屋

窓鏡のうき世をぬにゆき

官城御普清成能くて読家  
ゆ葉美ぬりるける

陪臣ハ朱買臣こしゆき乃袖

芭蕉をなをさる

表老ハ蘆もあけは 菴の雪  
門の雪梅阿りやとさる

山居の傍り

雪をぬき猿茶を煮たりた山

かも川は一あれとあけ

釈迦とよし路も雪の黒い水

ちんちんちんちん女のあし  
しーやいしけいさめり

醉吟

雪うしややりのをりす小忌衣

望叡山

雪や大の字枯る山の景  
戸障よりなほい雪し松乃声  
かかや竹田へ帰るもこの雪  
旅し女土佐をさるる

黒塚の客あしらふや 国乃雪

立徘徊

げつ雪や内よぬさか人き誰  
めつしいわう浮おん垣めつ  
野川の雪を秩輪よちらんりふ

或所方より雪らんぬらん  
あわさる上

初雪ふねやえんれそ雪もさあ  
楠の銅壺四回一回とらや  
万客の唇をくさるせを

まつ雪や湯のこ所の丸銅壺  
ぬもすりま川とまわりの

半袷の列隊とあや雪の松  
人も来ぬ良乃独酌

初雪や十も成るお酒のこし  
軍兵を圍撃てまらや 雪礎  
松の雪苔ふつこのはらりきり

前よりよき雪のり

歌集の人おなりつげいの雪

おちるゝ魚のりしきかあか

出立し

すきくゝの犬を拂ゆ油の雪

はるゝあるとらふあき

あまのや控へあるふきの宿

市仲深

初雪や門を 栲ある夕ちんき

不分當春作病文

ほおと病を悟ゆ一にあらは

極月十日西吹大坂のほよ

いししや足袋賣よまじうつ山

新羅めて食らあやうの柳を

餅花や灯をきく 壁の籠

餅と鹿と宿ハきくくくく

やうれそふや狹きあのら

書如くをゆと一斗の巻柱

座右銘

以て中や登りし取らる覺書  
乳母あえて去るも羨女年忘  
神前中百殿よりくはり  
のりおの中子眠泥

年忘劉伯倫を向あはせて

震博流火志つあつて

妹より也薑とけと餅の番  
煤掃てぬしおの女房めつりや

京より春をあらわす年  
かりの物お回すあり

以幸の牛はひらり年あつる

臘鬼五つの子を産り樊中よ  
やふをいしてお針もけい  
可をいしてひら

年をとる鬼は親へ焚ぬ豆  
すけつひの物いと倦てせ控  
童よふ志とる既中や煤をい  
忠信り芳野仕包やあはれい

有かしの親の悟氣もあはれ

用窓よ羽帯をめぐ

煤こもるもつもれた人の陸奥  
鼻を掃孔雀の玉や煤こもる  
御煤 翁ハ竹取

千山家と一高か

刻すもやハと女神楽男より  
揚屋と一醉房と

意の子養紙巻を吐く一と

身の市せれをよふし羽織よ  
小似城行てあふんこ一と  
山陵のき分を海す一と  
女子の抱瘡一と

箭の粉や必雪くつる津の味  
行高云可り津無り巻袖

系あけらノをあげくつる津楽性  
市隅

弱法師家門ゆきせ箭の札  
旭影屋の夕日志つせ

多良と松あまの市の夕あし

自海 三十

ふたふたのしんきいあしきいあしあし

大津譯

千觀のふるもせらばやうらさる

雪窓

損料の史記をゆきをの雪のふ  
年の所やひらめのむすの物思  
ひ年や終評定しあめを

